

富山城跡

現地説明会資料

富山市上下水道局下水道課
富山市教育委員会埋蔵文化財センター

◆あらし

1. **調査原因**：富山公共下水道松川雨水貯留施設築造工事に伴う発掘調査
2. **調査面積**：130 m²
3. **調査期間**：平成 23 年 12 月 15 日～平成 24 年 1 月 16 日
4. **調査主体**：富山市教育委員会埋蔵文化財センター
5. **工事主体**：富山市上下水道局下水道課
6. **発掘機関**：株式会社アーキジオ
7. **発掘調査のあらし**

富山城は、最初に城が築かれた戦国時代から現代までの層が何重にも重なっています。さらに古い室町時代や平安時代の出土品もあり、富山城の成立前にも人が生活していたことがわかっています。

今回の調査では、初代富山藩主前田利次が寛文元(1661)年に改修した西ノ丸北西側の水堀の堀底の一部を検出しました。富山城において江戸期の水堀の底を確認したのは今回が初めてです。

調査区の位置には、昭和 36 年に建築された旧市町村会館が建っていました。現地表面から約 4.8mの深さまでこの建物のコンクリート基礎構造物がありました。

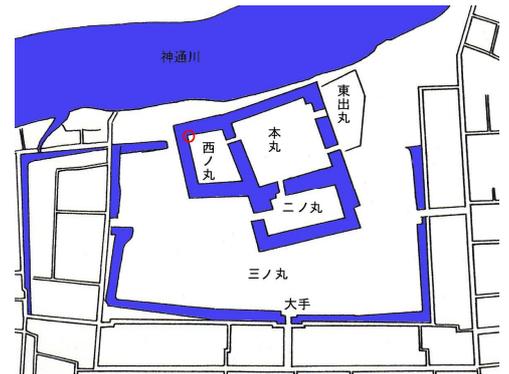


図1 寛文期富山城縄張図

◆堀とは

敵の侵入を防ぐために城の周囲に掘られた溝を堀といいます。土塁や石垣とあわせて防御を担う施設です。水の張られている堀を「水堀」、水の張られていない堀を「空堀」といいます。

富山城の堀は、本丸・二ノ丸・西ノ丸といった城の中心部を取り巻く「内堀」と、重臣の武家屋敷が建っていた三ノ丸に廻らされた「外堀」の二重の水堀が廻っていました。内堀は戦前までは残っていましたが、富山城本丸・西ノ丸の南側の内堀の一部を残し、戦後に埋められました。

水堀の水は、常願寺川から分流する小河川を通り、四ッ屋川などから流れ込み、神通川へ排出されました。

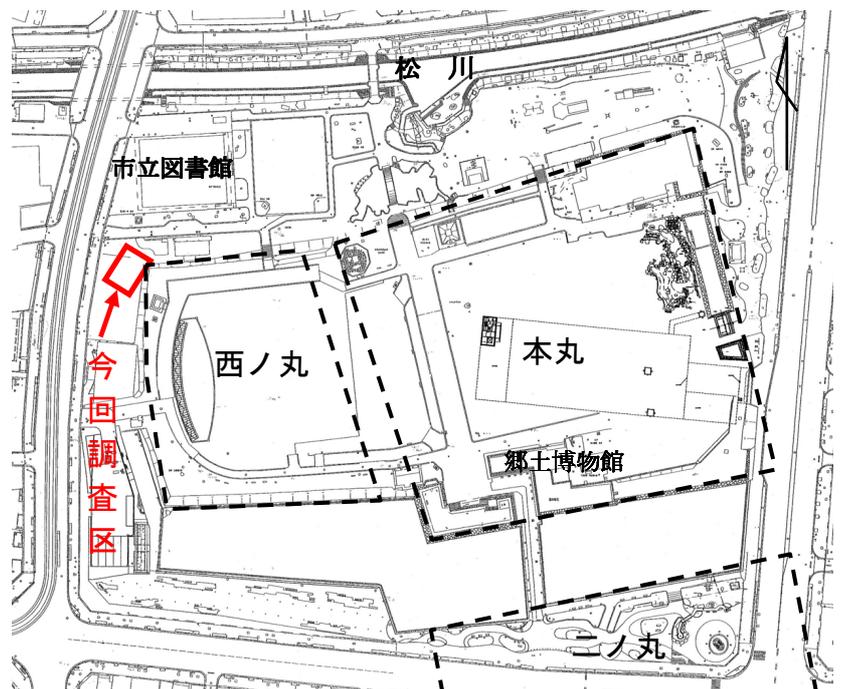


図2 調査区位置図

◆水堀跡

堀跡は、現地表面から5.2m下（標高2.5m）で、東西4m、南北10mを検出しました。それより上は旧市町村会館の工事で削り取られていました。この堀跡は、富山城西ノ丸北西隅の水堀跡と考えられます。

水堀の底面は水平で、箱堀の形態です。検出した堀の深さは、西側で50cm、北側で67cmです。堀底の標高は1.83~2.0mです。（図3・写真1）

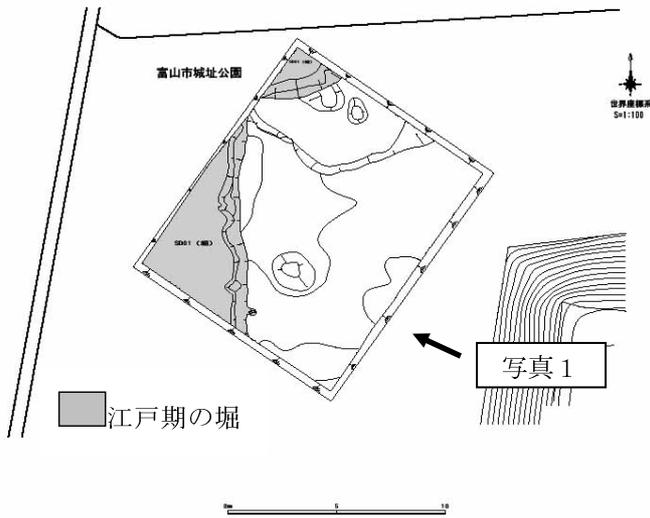


図3 調査区概略図



写真1 検出した堀底（南東から）

◆調査の考察

富山城において、水堀の構造を確認したのは今回が初めてです。堀底が確認されたことにより、西ノ丸の西端が、これまで推定していたところよりも10m程西へ伸びることがわかりました。

当時の水位は不明ですが、城址公園南側の堀の水位は標高6.9mですので、これよりわずかに低かったと考えられます。

現在の松川（旧神通川）の水位は、七十二峰橋付近で平均水位標高4.8mであり、江戸時代の旧神通川の水位もこれに近いと推定されます。したがって、水堀の水位が旧神通川の水位よりも少し高かったと言えます。

西ノ丸には、かつて高さ約4.0mの土塁が存在しており、水堀の堀底から土塁の頂部までは約11mの高低差であったと推定されます。（図4）

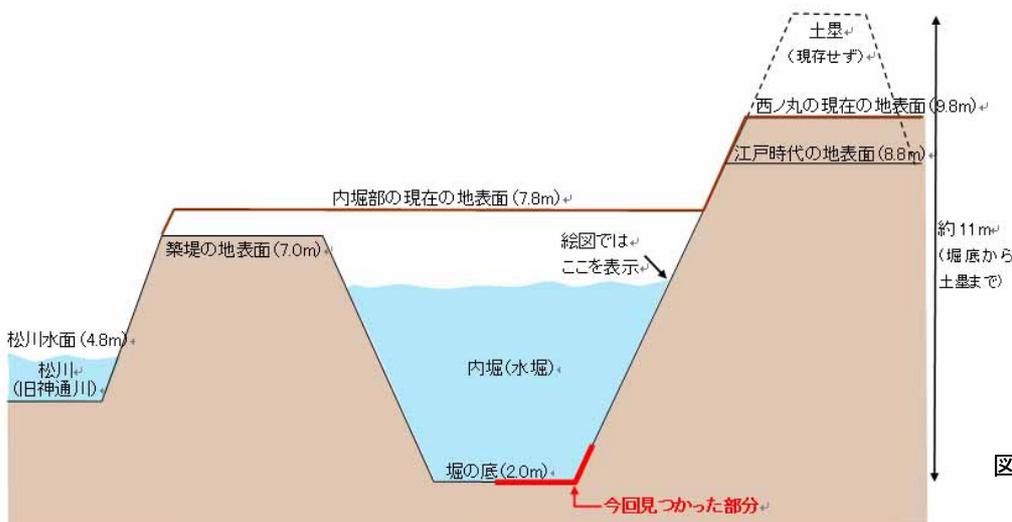


図4 水堀と松川（旧神通川）との関連模式図



図5 「万治年間富山旧市街図」（部分）
[富山県立図書館蔵]